

卒業生対談

どんな研究をしているのかも含めて自己紹介をお願いします。

小川 はい。京都大学理学研究科表面科学研究室の小川大樹です。やっている研究としては、STMという操作トンネル顕微鏡っていうのを用いて、とってもミクロな感じですごく細かい金属の表面を観察するといった研究をしております。その金属表面に他の金属の粒子をくっつけたりだとかして、まあ色々物質の反応を促進したり、新しい物質を作ったりということに役立てられるんじゃないかなという研究をしております。

水谷 自分は京都大学文学研究科歴史文化学専攻考古学専修にいる水谷凌です。やっている研究としては、歴史考古学っていうのをやっています。特にその時代の考古学で、自分がやっているのは遺構を使ったものです。そこから当時の都市計画を復元していただきますね。

都市には政治であったり経済であったりたくさんの方が住んでいたりするので、その当時の社会の縮図ともいえるので、そこを解明することによって、より当時の社会つてもを詳細に復元することができるのかなと思ってやっています。

村田 半分ぐらいわからないですけど、何を言っているか。でも、すごいなあ。まさしく出藍の誉れだと思いますよ、本当に。素晴らしいと思います。

京都大学で研究されようと思ったのはどうしてでしょうか。

水谷 学問的な理由といたしまして、自分は飛鳥時代をやっている。まあ、飛鳥っていうのは奈良県にあるところで、そこに近いところで研究をしたいなって思ったのが一点。日本で考古学が初めて研究室が開かれたのが、この京都大学。つまりは歴史があるってことはそれまでの学知が積み重なっているの、日本で研究するならここが一番かな。

小川 僕の場合は、センサー試験の結果も悪くなくて、東京大学にとりあえず二次試験出願してみようかなって思っていたんですけど、東大はもともと官僚を育てる大学っていうのはよくある話なんですけど、僕的には一つのことに対してガッツリのめり込んで研究してみたいものをやってみたかったので。

ただ研究はやりたいけど、どんな研究室に行ったらいいかわからないなって思っていたときに、京大の理学部は入ってから二年後に学科みたいなのを決めるんですね。二年間

いろんな分野に触れてみてから何を研究したかを決められるので、そこにすごい惹かれて京大を選びました。

桐 陽高校のしかも同じクラスで三年間通じていたわけですが、一番思い出に残っていることはなんですか。

小川 一番って言われると難しいですね。とりあえず最初に思い出したのは、入学式のガイダンスが終わった直後に、先生に「明日古文単語のテストがあるから、ここ勉強してきてね」って言われたことですね。

村田 いきなり小テストの範囲を言ったんだね。

小川 衝撃でしたね、あれは。ああ、そういうところなんだって思いました。思ったでしょう？覚えているよね。

水谷 その時、誰かが不合格にならない限りは、もう

平成三十年度卒業、英数進学コース出身の二人にお話を伺った。一人は京都大学へ進学し引き続き大学院へ進んだ小川大樹（おがわはるき）さん。もう一人は都内の私立大学へ進学したのち、京都大学大学院へ進んだ水谷凌（みずたにりょう）さん。かつて同じクラスで苦楽を共にした仲間が、時を経てまた同じ学舎で学問に励むことになった。超難関といわれる学府で研究を行う二人を産んだ英数進学コースでの3年間とは何だったのか。3年間担任を務めた村田明香先生を交えて当時を振り返っていた。

絶対頑張っていたよね。

小川 ああ、確かに。



水谷 だって一番最初ってやっぱ恥ずかしい。まだみんな慣れてない訳だし。慣れたらさ、やっちゃったーくらいでよかったです。

小川 まあでも怖かったしね。

水谷 一年の時は大変だったですけど、だんだん二、三年ぐらいいなってきたら勝手に慣れてきた。

村田 慣れたって言うているけど、毎時間のように小テストだったよね。だから黒板に、何時間目がこの小テスト、何時間目がこの小テストって書いたことがあった。だってマイナス一時間目みたいな、朝来てまずは英単語やって、ホームルーム中に古文単語と漢字をやり、そして各教科。はい英語で一個、社会で一個ってやっていたらね、一日に八個くらい小テストがあったんですよコンスタントに。しかも、それで不合格だと放課後ずっと残って追試やっていたから。

人 追試になるようなことはなかったのでしょうか。

水谷 いやいやいや、俺めっちゃ溜まったよね。

村田 でも別に全然ね、明るく乗りこなしていたって感じ。大樹先生はなかったんですけど。

大樹 樹さんは「先生」って呼ばれていたみたいですね。

村田 大樹先生は先生だったんです、みんなの。とにかくすごく優秀だったので、みんなが質問する訳ですよ、授業でわからなかったこととか、テスト前に知りたいこととか。

で、彼も学生だから当然テスト勉強しないといけないのに、自分のことは置いて、一人一人に丁寧に教える訳ですよ。こっちがび

っくりするくらいね。嫌な顔一つせず、聞いてきた子には一人一人全部丁寧に教えてあげてる。

小川 でも、それは高校生の時からずっと言っていたんですけど、教えることですよいい自分でも勉強になって、本当に。まあだから、勉強法ありますかって聞かれたら大体人に教えるのと絶対覚えるからいいよっていうんですけど、あれは僕なりの勉強ではありましてね。だから、わからなかったら質問しにおいてみてみんなも言っていました。

村田 一回だから、大樹先生を呼んで、あなたも学生なんだから自分の勉強もあるだろうからね、あんなに教えずともいいんだよって言った時に、今の答えが返ってきて。もう何も言えなくなっちゃったっていうか、自分が恥ずかしくて。教えられたって感じ。

自 分自身の勉強はどのようにしていたのでしょうか。

小川 だから、教科書をざっと読んだりはしましたけど、それこそ、数学とか理科だったら他の人から質問とかがくるんで、質問が来たときに、まあ教えるじゃないですか。教える時にも、問題のところだけを教えるんじゃない

なくて、単元で重要なところを取り出して教えたりの訳じゃないですか。その時に自分がちよつとでも詰まったなって思ったら、

「あ、ここ俺完全に理解できている訳じゃないんだな」ってわかるので、理解できてないところだけ、後で教科書読み返したりノート読み返したりして間に合わせていました。

自分から問題集何周もやろうとか、定期テストでは少なくともあんまりやってなかったです。

定期 テストの勉強とは別に、受験に向けて何か工夫したとか、努力したとかがありますか。

小川 僕は一つありますね。えっと僕は、ノートを一冊持って、自分の「わからないことノート」を作ろうと思ったんですよ。

例えば、化学の勉強をする時に、もちろん論理的な考えも必要だけど、当然知識も必要になってくる訳じゃないですか。で、その知識は知らないところだけを結局勉強すればいいわけで、知っているところを勉強する時間って復習にはなっているけれど、言ってしまうと、無駄っちゃ無駄なんですよ。

だから問題演習とかをして、ちよつと躓いたところがあつたら教科書に立ち返り、教科書の中で、「あ、この部分さえ理解できればこの問題解けたな」ってところをノートに書き出すんですよ。で、問題演習やって、「あ、ここまた解けないな」ってなって、それしたらまた教科書で「あ、この知識さえあれば解けたな」、でまたノートに返ってを繰り返すと、そのノートが自分の知らないことしか載ってないノートになるわけじゃないです

か。それを復習すれば、復習の効率が最大になるというか。ていう根拠のもと、僕はわからないノートっていうのを作っていました。

結局時間との勝負じゃないですか、受験勉強って。3年間しかないから。時間無駄に



水谷凌さん (裾野西中出身)

きないなって思って、そういうのやっていた。

そ れは一年生の頃から実践していたのでしょうか。

小川 いや、一年生の頃はそれやってなかったですね。正直一、二年生の頃は言われたことを全部やっていただけでした。まあ言われる量多いので、それだけで十分時間がたっていたんですけど。

それをやっているうちに当然、この問題やっていたことあるな、これは流石に復習しなくても解けるなって授業とかでも出てくるわけじゃないですか。その時に、時間もつたいない、もつたいないって言い方はあれですけど、これやらなくてもいいんじゃないかなって気づいたとこで始めましたね。三年生ぐらいいなりましたか。

水谷 私立文系なので、英語がかなり重要な



小川大樹さん (伊東南中出身)



うけど、彼の中では苦手意識があるんだね。テストが多くて、逃げたいとか思ったことはないですか。

水谷 一年の頃は結構きつかったんですけど、友達との存在っていうのは大きいですね。なんか、追試の勉強とかも一緒にやったりとかしていたのでその辺はやっぱ大きかったのかなとは。

小川 仲間意識っていうのはありましたね。

水谷 仲間意識しかなかった。競争相手のなのはあんまない。

小川 競争相手って考えたことはなかったなあ。

村田 競争相手はだっって日本全国にいた訳だから、あんな少人数は競争相手じゃないんだよね。仲間なんだよね。そういう感じだったよね。

担 任の先生から見ると当時の二人はどんな感じの高校生でしたか。

村田 大樹先生は、もう先生なのでみんなから一目置かれ、尊敬される存在で、そういう感じ。

凌ちゃんはクラスのアイドル的な、結構言いたいことも言うし、やんちゃなこともやるけどなぜか好かれるって言うかね、お茶目な感じですよ。で、歴史に関してはもう突拍子もなく知識があったし、話し出すと止まらないし、きっと将来そういう方向に進むんだらうなって思っていました。

実は大学を選ぶとき、正直私はこの二人には、「もつと」という気持ちがあった。大樹先生だっって明らかに東大受かるよねっていう感じなのに、京都大学を選んでいる。で、凌ちゃんの方も、歴史をやりたい人だったら

憧れるそういう大学んだけど、でもネームバリューとかね、そういうところを考えたら、もつといわゆる有名大学にいくつも受かっていたのに、それを蹴って考古学をやるならこの大学だっって選んでいる。そういう人たちだったんですよ。

本当になんか型にはまっってないというか、我が道をゆくというか、人がどう思おうと自分のやりたい道を進むんだっっていう信念を高校時代からもっっている子たちだったなと思いますね。

桐 陽高校の3年間とか、英数で過ごした3年間というのは、今振り返ってみて、どんな意味があったと思いますか。

水谷 なんか勉強的な意味だと、やらなきゃいけないからやるっていう力がついたのかなと思います。好きだからやるっていうのは重要なんですけど、必要だからやるっていうのもかなり大事なんです。論文とか読むのも別におもしろくないし、だけど「必要だからやるか」っていうのが、できるようになっただのかなとは。

小川 確かにね。さっきの小テストの話もさうだけど、とりあえずなんかやっても意味なさそうじゃないけど、そのとき辛くてやりたくないことでも、結局後になって、ああこれやってよかったなって思えることがあるんだなって学んだね。

も 桐陽高校に入学していなかったとしたらどうでしょう。

小川 まあ京大にはきていないですね、俺は。

水谷 俺はもしかしたら、京大の院には来れてなかったかもしれない。やっぱ習慣がなか

った。必要だからやるっていう習慣、多分。他の学校に行った友達なんかの話を聞くと必要だからやるって定期テストとか、たまにある朝テストぐらいで、毎日朝テストなんてないので。だから習慣付けっっていうのはできなかったのかなとは。

小川 僕も正直言われたことは頑張るけど、自分から自主的に頑張るタイプではなかったんですよ、中学生の頃。

言っってしまうと、僕、公立高校から落ちて桐陽高校きたんですけど、その落ちたのも自分から勉強する習慣がなかったからだと思っっていて、英数でこれやりなさいって提示してくれた方が自主性がない僕にとってはよかったのかなとは思っていますね。

そ の経験から後輩たちに伝えたいことはありますか。

小川 さっきも言っただけど、やってよかったって絶対思うからね。小テストとかそういうことに関しては、まあ、これはやんなくてよかったなっということがなかったわけじゃないけど、長年桐陽高校の生徒を見てきた先生たちなら言っっていることと多分間違いないから。いつか実を結ぶと信じてやるしかないかな。

水谷 まあ、似ていることなんですけど、小テストバンバン落ちちゃって病んでいる子もいるんじゃないかなとは思っていますけど、まあ自分もめっちゃ落ちていたことから言うところ、落ちているのって、何もやらないから落ちているわけじゃなくて、一応それなりにやっていると思うんですよ。

それって今は落ちているかもしれないけど、自分の中で必ず塵が積もっているような感じになるので、受験の時に本格的に勉強し

ところで。私立文系っていうのは選択式で処理能力が試されるんですよ。自分はその処理能力ってものを向上させるために、単語やりましたね。私大はマニアックな単語とか多いので、学校から配られた単語帳だけじゃなくて、自分で買った単語帳やっていました。あとは文法問題とかも、これがきたからこうだっっていう選択ができるような問題なんです。だから文法とかまる覚えでやっただっっていう感じで。英語は苦手だったんですけど、一、二年で小テストめっちゃくちゃやってたんで、なんか気づかないうちに基礎できていたなっって。

村田 苦手って言ってるからね、聞いている人はどれくらいできなかったんだらうっって思っっているでしょ。センターで80%以上占取っっているからね。それって苦手じゃないと思

ようになって思った時に必ず実を結びますね。

小川 正直、一、二年の段階で小テストのあたりがたみつてあんまわからないよね。

水谷 わからない。実際受験勉強やってみると、「あ、なんか基礎ついているな」ってわかる。

小川 そうそうそうそう

水谷 だから単語の暗記とかも、ペース自分で考えてやらないといけないっていうのはちょっと大変だし、むしろ楽しんでいると思ってくださいって感じがなのかな、自分でペーす決めなくていいから。ちよつとペースきついかもしいけど、自分で一から組み立てるっていうことしなくていいのは案外楽だよって。大学入るとわかる。

時の担任の先生を目の前にしてに何か伝えたいことはありますか。

水谷 まあやつぱ小テストとか色々指導してくれていたのがあるがたい。

小川 いや、本当にありがたいです。

水谷 学年が上がるに連れてちよつとずつ自由らせてくれたのありがたいですね。

小川 そうだね、メンタル的にもね。三年生に近づくにつれて自分がやらないといけない勉強って多分絶対自分でもわかっているとと思うので。

水谷 一年がキツくて三年が緩かったから受験期はなんかピリピリとかはしてなかった。

小川 そうだね。受験期あんまりピリピリしなかったね、そういえば。

村田 三年生になれば担任がギューギューやらなくてもみんなプレッシャー感じてるし、焦りもあるしほつといたってやるから、むしろ



ろそこは楽しい雰囲気は絶対必要じゃないですかね。だって一年生の時はもうギューギュー……。

小川 そう。せつかく耐え抜いたのに三年生で無駄にするっていうのはたぶん……

村田 そうなのは、信頼関係ができていてっていうのもあって、「大丈夫、大丈夫、放つといつもこの人たちちゃんとやるよ」っていう思いがすごくあったんだよね。

小川 もう一ついいですか？勉強法のところて言い忘れたところがあった。

えつと僕、場所と行動の結びつきがすごい強いと思っていて、学校にすごい土日もずつと行っていたんで、多分クラスで一番いた時間長いかもしいないんですけど。とりあえず、僕は家は勉強しなくてもいい場所だと考えて、学校は勉強する場所だと考えて、教

科書を開いてペンを持って、という動作がいないじゃないですか。でも場所によって行動を決めておけば、学校に行くっていう簡単な動作だけでもう勉強が保障されるんですよ。絶対に勉強する時間が。

そ こに行けば勉強するスイッチが入るようになっていたということですか。

小川 そうなんです。もう家を出たらそこから帰る人はなかなかないじゃないですか。だからもう家を出るっていう動作さえすれば後はもう勉強できる場所まで。

僕の場合は、学校全体が勉強場所だったんですけど、まあそれは人によって変えてもよくて、例えば教室だったら友達と喋る場所で、勉強するなら絶対に図書室に行くとかにしとけば図書室は勉強する場所になるから、教室で友達と喋っていても、ちよつと図書室行くわって言うって図書室さえ行けば後は勉強するようになるっていうのが僕の持論になります。これだけは話しておきたかったです。

村田 凌ちゃんだって学校来ていたよね。あのクラスの特徴はやたら学校に来たこと。

水谷 なんだかんだ学校きていたよね土日も。内容はどうあれ。友達に会いたかったっていうのもあるんじゃないかな、わからないけど。

村田 実は生徒だけじゃなくて、教員も仲間を支えられていて、学校に行けばいつも同じ先生がいる、あの先生たちがいるって思えば休日も行けたんだよね、同じなんです。大事なんです。一人だったらできなかったこと、仲間がいたからできた。だからそうなのかなって彼らも。その仲間がこういう形でまた再会するって運命だね。

一 つのクラスから複数人が京都大学の大学院に在籍するのは、全国的にみても数えるほどではないでしょうか。

水谷 多分あんまないよな、院が一緒は。学部が一緒はあると思うけど。

今年もなんか京大出てましたよね。

村田 先輩が道を作ってくれたの。

水谷 現実味を帯びるって結構進学校で聞きますね。「あの先輩が行けるんだったら俺も行けるか」って、俺の友達も言っていました。そういう文化があるって。

桐 陽高校にもそんな文化ができているのではないでしょうか。本日はお三方ともありがとうございました。

小川 ありがとうございます。

水谷 ありがとうございます。

村田 ありがとうございます。

